

書誌コントロールに関する最近の動向：LOD時代の目録

渡邊隆弘 (帝塚山学院大学)
watanabe@hs.tezuka-gu.ac.jp

はじめに

●開催案内から

発表者はこのところ毎年の『図書館年鑑』に、書誌コントロールに関する内外の動向をまとめた記事を執筆している。今回の発表では、2012年後半から2014年初頭の動向整理を行う。RDAの実装やBIBFRAMEの策定、国内ではNDL・NIIの動きなど、この間の諸動向の多くは、当研究グループの現在の研究テーマにある「LOD時代」を背景としている。オリジナルな研究発表ではなく概説的な内容となるが、可能な範囲で発表者なりの分析・展望も述べたい。

●関連発表物

- ・『図書館年鑑』2008～ 「問題別図書館概況：整理技術と書誌情報」(毎回3ページ)
前年(暦年)の内外の概況
*本日は、「2010概況」～「2013概況」を配布
- ・「図書館目録をめぐる動向：2007～2012」『情報環境の変化に適切に対応する目録規則の在り方に関する研究：研究成果報告書』2013.3. p.106-129.¹
*「2007概況」～「2012概況」をもとに再構成・加筆したもの
- ・「情報組織化関連記事一覧2010」 <http://josoken.digick.jp/bib2010/>
- ・「ウェブ時代の新しい書誌データモデル“BIBFRAME”」『カレントアウェアネス-E』230, 2013.1. ²
- ・「典拠コントロールとオントロジー：豊かな情報アクセスのための基盤」『情報の科学と技術』61(11), 2011.11. p.434-440
- ・「新しい目録規則(RDA)から得られるもの：機械可読性の視点から」『図書館界』63(2), 2011.7. p.114-121
- ・「典拠コントロールの現状と将来」『情報の科学と技術』60(9), 2010.9. p.371-377

★4年前の本研究会

- ・情報組織化研究グループ月例研究会「情報組織化をめぐる最近の動向」(2010.5) ³
この続編のようなイメージで

●目次

1. 4年前(2010.5)に述べたこと(ふりかえり)
2. LOD (Linked Open Data) と書誌コントロール(年鑑「概況」から)

*ここからは、2012年後半～の諸動向
3. 目録サービスの動向 *かんたんに
4. 書誌コントロール政策、目録業務の動向
5. 目録法の動向(目録規則と書誌フレームワークを中心に)

¹ <http://www.tezuka-gu.ac.jp/public/libsci/kaken2010-report/overview2007-2012.pdf>

² <http://current.ndl.go.jp/e1386>

³ <http://josoken.digick.jp/meeting/2010/201005.html>

1. 4年前(2010.5)に述べたこと

●図書館目録「変革」の背景

- ・インターネット時代の、「目録の危機論議」
「検索」「メタデータ」における図書館の「陣地縮小」
- ・今後の目録に求められるもの
「付加価値性」と「開放性」

●目録サービスの変革

- ・「次世代OPAC」の登場
日本では、ようやく本格導入例(慶應、筑波)
- ・目録データの外部開放
Web APIによる書誌データ公開(WorldCat, PORTA, CiNii)
- ・図書館外での注目: カーリルなど

●書誌コントロール政策、目録業務の変革

- ・LCの*On the Record*と周辺の動き
- ・OCLCの拡大路線
- ・わが国における検討: NDLとNiiを中心に
NDL「書誌データ作成、提供の方針(2008)」
NII「次世代目録所在情報サービスの在り方について」(2009)
JLA「書誌データの一元化」提言(2010) *「公共的書誌情報基盤」前夜
- ・焦点をまとめるとすれば: 図書館外のメタデータの有効活用と、集中と分散のバランス

●目録法の変革(目録規則を中心に)

- ・背景: 対象資料の変化、組織化環境の変化、OPAC高度化要求、メタデータの相互運用性
- ・FRBR(書誌レコードの機能要件): 概念モデルの確立 1997発表
- ・国際目録原則: パリ原則(1961)に代わる新原則 2009刊行
- ・ISBD(国際標準書誌記述)統合版への動き 草案段階(2011刊行)
- ・RDA(Resource Description and Access) 刊行寸前(2010.6刊行)
コンセプト、策定への紆余曲折、概要・特徴、NACSIS-CATとの対照、実装への動き
- ・NCR(日本目録規則)の動向: 改訂方針(2010.9)前夜

- ・目録規則の今後について、まとめるとすれば
「関連」の重視と典拠コントロール
資料の物理的側面と内容的側面の整理
機械可読性の向上
相互運用性の確保
→目録の「付加価値性」と「開放性」

2. LOD (Linked Open Data) と書誌コントロール

●図書館界とLOD

- ・『図書館年鑑』「整理技術と書誌情報」では「2010 概況」が最初

書誌情報を Linked Data と呼ばれる形式で外部開放する動きがいくつか見られた。ドイツ国立図書館による典拠データ公開 (4 月)、JISC (英国情報システム合同委員会) による英国全国書誌データ公開 (11 月) などである。Linked Data とは、いわゆる「セマンティックウェブ」の実現を視野に入れて、URI (統一資源識別子) を付すなど外部システムによる利用をしやすい形式でのデータ公開を指す。図書館が培ってきた組織化情報を、図書館コミュニティ内にとどめずウェブ空間上でのさらなる存在感を持たせようという動きである。

- ・もう少し前、2008～2009 ごろから、図書館界でも開かれるように
- ・関連する「セマンティックウェブ」「Web API」はもっと前から

●『図書館年鑑』「整理技術と書誌情報」におけるLOD関連事項

- ・2008 概況

次世代目録所在情報サービス (NACSIS-CAT) 中間報告書: Web API の意義を認めつつも、慎重
PORTA (NDL) の API 公開

- ・2009 概況

OCLC WorldCat データの利用・再配布の権利に関する論議

次世代目録所在情報サービス最終報告書: API 公開の課題を検討しつつ、実験的環境を提言
CiNii の API 公開

- ・2010 概況

ドイツ国立図書館の典拠データ公開、英国全国書誌データ公開

NACSIS-CAT 典拠の VIAF 搭載テスト: 実運用には、参加機関側の意向確認が必要

「Web NDLSH」公開: セマンティックウェブ、LOD を意識し、SKOS 形式を採用

NDL 公開講演会「セマンティックウェブと図書館」

岡崎図書館事件 (Librahack 事件) をめぐって

カーリルの登場: 図書館側のデータ外部公開が進めば、さらなる可能性?

- ・2011 概況

W3C の Library Linked Data Incubator Group による報告書

LC における「書誌フレームワーク変革」の動き: LOD を重視する General Plan

RDA の語彙をメタデータレジストリに登録する RDA Vocabularies

CiNii Books の登場: 各種の API を装備し、開放的

NDL サーチの API 公開 (新着図書情報を含む)

「Web NDL Authorities」公開

- ・2012 概況

BIBFRAME 素案の発表 (LC)

ISBD 及び FRBR の語彙をメタデータレジストリに登録する動き (IFLA)

VIAF が OCLC サービスに: Wikipedia との相互リンクなど

ドイツ、デンマークの国立図書館などで、書誌データの LOD 公開

「Web NDL Authorities」の正式運用、固有名典拠データの VIAF への登録

NII「電子的学術情報資源... 構想」報告書: LOD を強く意識

ジャパンリンクセンター (JaLC) に向けた動き

- ・2013 概況

BIBFRAME 関係続報

NDL サーチの「Web API によるシステム連携ガイドライン」

NACSIS-CAT データの公開に関するパブリックコメント

3. 目録サービスの動向 *かんたんに

●「次世代 OPAC」からディスカバリ・サービスへ

- ・国内でも、かなり普及
ディスカバリでは、日本語コンテンツの収録が焦点の一つに
- ・NISO の Open Discovery Initiative によるディスカバリの推奨指針 (2013. 10 に草案)⁴

●NDL と NII

- ・NDL の検索システム
2012. 1 システム更新 : NDL サーチの正式公開、検索システムの統合・再編成
2013. 4 「WebAPI によるシステム連携ガイドライン」
2013. 8 NDL ラボサーチ
- ・NII の CiNii Books (2011. 11～)
書影表示、ソーシャルメディア連携 (2012)、内容説明・目次情報 (2013) など
小回りのきく開発・運用体制による、頻繁な機能改善

●目録データの外部開放

- ・国立図書館による、書誌データ・典拠データの大規模な LOD 形式の公開
2012 ドイツ、デンマーク
他に、スウェーデン、フランス、イギリス、スペイン、ハンガリー など
- ・NDL サーチ、CiNii Books の API 公開
- ・Web NDL Authorities (国立国会図書館典拠データ検索・提供サービス) の正式運用 (2012. 1)⁵

4. 書誌コントロール政策、目録業務の動向

●UBC (Universal Bibliographic Control : 国際書誌コントロール)

- ・IFLA 「国際書誌コントロールに関する声明」 (2012. 12 付 公開は 2013. 2)
IFLA Professional Statement on UBC⁶
1970 年代からの UBC 活動の蓄積 → 現在は「書誌コントロール」を関した常置組織なし
書誌分科会が中心となって作成し、理事会直下の Professional Committee の承認

<時代認識>

- ・1970 年代の理念 : 各国の全国書誌作成機関が自国の出版物と著者に責任を持って作成し、持ち寄って共有
- ・1990 年代以降の変化 : 利用者の文化的多様性の観点から、相互排他的でない方式 (VIAF のような)
- ・ウェブ時代 : 図書館界を超えた情報共有の可能性、そして一方で信頼性のあるデータの必要性

<次の原則を再確認>

- ・全国書誌作成機関には、自国の出版物のデータを作成・公開する責任 (書誌データのオープンアクセス)
- ・全国書誌作成機関には、典拠データも整備して公開する責任
- ・IFLA には、書誌データ共有の基礎として ICP (国際目録原則) を維持する責任
- ・IFLA には、各種の書誌標準を維持していく責任
- ・IFLA には、標準の広い互換性を確保するため、他の国際組織 (例 : ISO、ICA、ICOM) と連携する責任

⁴ http://www.niso.org/apps/group_public/document.php?document_id=11606

⁵ <http://id.ndl.go.jp/auth/ndla>

⁶ <http://www.ifla.org/publications/ifla-professional-statement-on-ubc>

●VIAF (バーチャル国際典拠ファイル) の展開

- ・米独仏の国立図書館が関わるコンソーシアム運営から、OCLCに移管 (2012. 4)
28 カ国 34 機関 レコード数約 3,300 万件 (2013. 7 現在)
- ・VIAFbot プロジェクトによる、Wikipedia との大規模連携 (相互リンク) (2012. 12) ⁸
- ・国立国会図書館の参加 (2012. 10) に伴い、日本語インターフェース

●NDL の新しい書誌データ作成・提供方針

- ・「国立国会図書館の書誌データの作成・提供の新展開 (2013)」⁹
「作成・提供の方針 (2008)」の後継で、約 5 年間を見据えた方針

<p>1. 趣旨 図書館資料と電子情報のいずれにも迅速・的確・容易にアクセスできること、広く書誌データの利用を促進することを目指して、書誌データ作成・提供を行う</p> <p>2. 図書館資料と電子情報の書誌データを一元的に扱える書誌フレームワークの構築 MARC に替わる、ウェブ環境に適した (LOD 対応など) フレームワーク</p> <p>3. 図書館資料と電子情報のそれぞれの特性に適した書誌データ作成基準の策定 国内外の動向に留意しながら、特に、RDA に対応した作成基準を</p> <p>4. 典拠データ作成対象の拡大、主題情報・各種コード類与の拡充 コストも勘案しながら、雑誌記事索引等の典拠管理、統一タイトル・ジャンル形式典拠の導入</p> <p>5. 電子情報の書誌データの、全国書誌への収録</p> <p>6. 書誌データの開放性の向上 新しいフレームワークによる書誌データの提供、国際的流通の促進</p> <p>7. 出版・流通業界、関係機関との連携 書誌データ作成・提供の迅速化・効率化。特に NII とは技術面も含めた協力</p> <p>8. 今後、必要に応じて見直し</p>
--

Cf. 「方針 2008」: 書誌データの開放性、検索システムの向上、シームレスな情報アクセス、書誌データの有効性の向上、作成の効率化・迅速化、外部資源の活用

・全国書誌サービスをめぐって: 「公共的書誌情報基盤」その後

2012.1	前年で週刊『日本全国書誌』(ホームページ版) は終刊し、NDL-OPAC からのダウンロードに NDL-OPAC で納本資料の簡略書誌情報「新着書誌情報」も検索可能に (従来は NDL サーチのみ)
2012.2	NDL サーチで「近刊情報センター」提供の近刊図書情報が検索可能に
2012.12	NDL-OPAC の「書誌情報提供サービス」画面が「全国書誌提供サービス」に
2013.1	NDL サーチを通じて、全国書誌データの RSS 配信
2013.4	JAPAN/MARC データの頒布方式が MARC21 フォーマットに統一 JLA に代わって日本図書館事業協会と文字・活字文化推進機構が頒布元に
2013.11	「書誌データ活用説明会」の開催
2014.3	NDL サーチを通じて、全国書誌データの OAI-PMH 配信
2014.4	「全国書誌データ提供」ページ開設

・書誌データの国際流通

- OCLC と協定を締結し、VIAF への典拠データ提供 (2012. 10)
Web NDL Authorities から VIAF へリンク (2012. 12)
2013 からは月次更新

⁷ Virtual Internet Authority File <http://viaf.org/>

⁸ 石橋恵「図書館データと Wikipedia をつなぐ VIAFbot」『カレントアウェアネス-E』251, 2013.12 <http://current.ndl.go.jp/e1517>

⁹ 「書誌データの基本方針と書誌調整」<http://www.ndl.go.jp/jp/library/data/kihon.html>

原井直子「国立国会図書館の書誌データ作成・提供の新展開 (2013)」について」『情報管理』56(9), 2013.12. p.592-601.
策定に先立ち、24 年度の書誌調整連絡会議のテーマに http://www.ndl.go.jp/jp/library/data/h24_conference_report.html

OCLC WorldCat へのデータ提供

単行資料データ JAPAN/MARC(M) 2012 提供、2013 からは月次更新

逐次刊行物データ JAPAN/MARC(S) 2013 提供

雑誌記事索引データ 2013 提供

●NACSIS-CAT の新たな運営枠組みとデータ公開

- ・「電子的学術情報資源を中心とする新たな基盤構築に向けた構想」(2012. 3)¹⁰
(NII 学術コンテンツ運営・連携本部図書館連携作業部会)
全体方向性： 電子情報資源の確保、メタデータのオープン化、統合的発見環境
目録関連では： NACSIS-CAT の LOD 対応、電子資料管理との統合インデックス整備など
NII と大学図書館の連携協力による、推進体制の確立
- ・NII と国公立大学図書館協力委員会との「連携・協力推進会議」(2010 発足) のもとに、
「これからの学術情報システム構築検討委員会」設置 (2012)
→2013 年度以降、NACSIS-CAT に関する検討を、「NII 図書館連携作業部会」から引き継ぎ
- ・「総合目録データベースのデータ公開方針」(2014. 2)¹¹
2013. 2 連携・協力推進会議でオープン化の検討を了承
2013. 12～2014. 1 パブリックコメント → 2014. 2 連携・協力推進会議で方針了承

- ・書誌情報、所蔵情報、典拠情報の公開 (対象ごとに公開範囲を設定)
- ・公開の主体はNII、運用の検討は「これからの学術情報システム構築検討委員会」
- ・CC-BY (表示) ライセンスによる公開 (改変や営利利用の制限は行わない)

5. 目録法の動向 (目録規則と書誌フレームワークを中心に)

●IFLA 目録分科会の諸動向

- ・FRBR Family / ICP (国際目録原則) / ISBD (国際標準書誌記述) 統合版 は、一段落
- ・ISBD、FRBR に関わる語彙 (エレメント等) をメタデータレジストリに登録 (2012)¹²
- ・FRAD (典拠データの機能要件: 2009) が、若干の修正を加えてウェブ公開 (2013. 7)¹³
- ・FRBRoo (FRBR のオブジェクト指向モデル版) を継続資料用に拡張した、PRESSoo の作成 (2013: ISSN 国際センター等による)¹⁴
- ・今後の方向性 *公式の方針文書はなく、議長の機関誌寄稿 (2013. 12)¹⁵による

- ・FRBR Research Group のメイン課題は、FRBR 関係 3 文書の統合
- ・2014 年春に ISBD の利用調査 → 多くの国が RDA を採用する状況下で、ISBD の将来検討
- ・ICP の改訂に向かう: FRAD、FRSAD との整合性を図る方向だが、さらに大規模改訂するかどうかは、今後検討

¹⁰ http://www.nii.ac.jp/content/archive/pdf/content_report_h23_with_glossary.pdf

¹¹ <http://www.nii.ac.jp/CAT-ILL/about/infocat/od/>

¹² The ISBD Vocabularies <http://iflstandards.info/ns/isbd/>

The FRBR Vocabularies <http://iflstandards.info/ns/fr/>

¹³ <http://www.ifla.org/publications/functional-requirements-for-authority-data>

¹⁴ <http://www.issn.org/the-centre-and-the-network/our-partners-and-projects/pressoo/>

「フランス国立図書館と ISSN 国際センターのプロジェクト (逐次刊行物目録の FRBR 化) について」『NDL 書誌情報ニュースレター』25, 2013. http://www.ndl.go.jp/jp/library/data/bib_newsletter/2013_2/article_03.html

¹⁵ Hanne Hørl Hansen "Letter from the Chair", SCAT news, 40, 2013. <http://www.ifla.org/files/assets/cataloguing/scatn/scat-news-40.pdf>

●RDAの動向¹⁶：実運用へ¹⁷

- ・刊行 (RDA Toolkit の運用：2010.6) 後、導入テストで問題点が指摘され (2011)、実装は先送りに
- ・JSC (Joint Steering Committee for Development of RDA) の対応努力 (文章のわかりにくさなど) を受けて、LC が 2013.3.31 の実装を表明 (2012.3)

・予定どおり、2013.3.31 から北米を中心に実運用へ

LCをはじめ、英・加・豪の国立図書館も
 OCLCは、RDA Policy Statement¹⁸の適用開始 (強制するわけではなく、AACR2の使用も可能)
 MARC21を改訂 (2008年から随時実施) して、RDAデータを格納¹⁹

・英語圏以外の状況

シンガポール、マレーシアの国立図書館で既に運用
 欧州は、EURIG (European RDA Interest Group：2010～) で諸活動
 2013年に行った調査の結果が2014年に発表される予定
 オランダ、スウェーデン、フィンランドの国立図書館で導入計画？
 当初2013年導入としていたドイツ国立図書館等は、2015年に？

・翻訳の状況

フランス語、ドイツ語：2013.5にRDA Toolkitに搭載
 スペイン語：RDA Toolkitに搭載予定
 中国語：国家図書館により冊子体で出版予定

・改訂サイクルの確立

夏までに提案受付 → 11月にJSC会議 → 決定したものを、翌年前半に反映
 軽微な修正事項 (Fast Track)、用語集の追加は随時

<2012年以降の改訂状況>

2012.4：2011年のJSC会議の事項17件、軽微な修正63件、用語集の修正1件
 2012.6：軽微な修正35件、用語集の追加25件・修正5件
 2012.8：軽微な修正93件、関連指示子の追加5件、用語集の追加50件・修正2件
 2012.10：軽微な修正18件、用語集の追加15件・修正2件
 2012.12：一部の章の文章リライト (rewording)、軽微な修正29件
 2013.5：軽微な修正143件、用語集の追加44件・修正2件、rewordingの完了、(仏・独語版の搭載)
 2013.7：2012年のJSC会議の事項43件、軽微な修正71件、用語集の追加4件・修正6件
 2013.11：軽微な修正132件、用語集の追加52件・修正18件
 2014.2：軽微な修正約50件、用語集の追加8件・修正11件、(豪国立図書館適用細則の搭載)
 2014.4.22 (予定)：2013年のJSC会議の事項

・エレメントと語彙のOMR (Open Metadata Registry) 登録²⁰

¹⁶ RDA toolkit <http://www.rdatoolkit.org/>

JSC (開発合同委員会) <http://www.rda-jsc.org/rda.html> *毎年の活動をコンパクトにまとめたAnnual Reportも掲載

¹⁷ RDA刊行後の諸状況については、古川肇氏、和中幹雄氏の研究に詳しい。

古川肇「刊行前後のRDA：RDAの適用への道程」『資料組織化研究-e』62, 2012.4. p.1-10.

和中幹雄「RDAをめぐる最新状況と目録法の課題整理」『TP&Dフォーラムシリーズ』21, 2012.8. p.11-23.

和中幹雄「「決定をRDA刊行後に持ち越した課題」から見るRDAの方向性 (2) RDA本格導入直前の改訂作業について (その1)」『資料組織化研究-e』63, 2013.2. p.11-31.

和中幹雄「「決定をRDA刊行後に持ち越した課題」から見るRDAの方向性 (3) RDA本格導入直前の改訂作業について (その2)」『資料組織化研究-e』64, 2013.4. p.14-27.

¹⁸ <http://oclc.org/rda/new-policy.en.html>

¹⁹ 渡邊隆弘「新しい目録規則 (RDA) から得られるもの：機械可読性の視点から」『図書館界』63(2), 2011, p.114-121

²⁰ 和中幹雄氏による、当グループの2013年6月月例研究会および2013年度日本図書館研究会研究大会でのご発表に詳しい。当グループの2013年度「グループ研究論文」として「エレメント・セットと語彙から見たRDA理解」が『図書館界』66巻2号 (2014.7) に掲載される予定

LOD、セマンティックウェブに対応したプロジェクト (2008～)
 RDA で設定されたエレメント全てに URI を付してレジストリ登録
 2014.1 に従来の構成を組み替えた「確定版」(Published Version)²¹
 各エレメントに設定された選択語彙リスト等にも URI を付してレジストリ登録
 例: Base material エレメントにおける、paper, parchment, stone など
 2011 以降、順次確定版

●書誌フレームワーク BIBFRAME²²

- ・MARC に替わる「書誌フレームワーク」
 メタデータの意味的側面と構文的側面
 一般にメタデータ規則 (DC など) は意味的側面 (エレメントの設定と値ルール) のみ扱う
 構文的な表現方法は、意味的側面とは分離: 例えば、RDF (Resource Description Framework)
 RDA も、AACR2 とは異なり意味的側面のみ (「記述文法」等は存在しない)
 構文的側面は、規則の外側
 現状は、MARC21 を改訂して使用 → 時代遅れは否めないなので、新しい形を
On the Record (2008) 勧告: 「より柔軟で拡張性の高い、メタデータ・キャリアの開発」

・LC により、2011 から検討

声明「Transforming our Bibliographic Framework」(2011.5) が最初
 Bibliographic Framework Transition Initiative の取り組み
 以降、数度の文書を経て、2012.11 に Primer document (初期文書)²³
Bibliographic Framework as a Web of Data: Linked Data Model and Supporting Services
 「データのウェブとしての書誌フレームワーク: リンクトデータモデルと支援サービス」

<LOD を強く意識した、新しいフレームワーク>

- ・背景として、LOD を説明する章
- ・MARC の代替だけでなく、ウェブ世界において、より広い情報コミュニティとの関わりの中で書誌情報を活用

<「リンクトデータ・モデルとしての書誌フレームワーク」>

- ・E-R モデル (実体関連モデル) によるデータモデル
- ・LOD の一般的な表現方式である RDF の考え方に従い、実体・属性・関連を URI で識別
- ・この文書では、最上位の4実体の設定のみ
 属性・関連の実際や構文表現には踏み込まない

<4つの最上位実体>

- ・Work (CreativeWork) : 著作
 FRBR の著作に加え、表現形も包含していると思われる (文書中には明記なし)
- ・Instance : インスタンス
 FRBR の体現形にあたる
- ・Authority : 典拠
 個人・団体・主題概念など、さまざまなもの
 図書館界外の同種の試みも包含しうる「共通で軽量の抽象レイヤー」
- ・Annotation : アノテーション
 所蔵情報、表紙画像、レビュー、利用統計データなど、他の3実体に付随する
 さまざまな情報

²¹ RDA Element Vocabularies in GitHub. <http://www.rdaregistry.info/>

²² Bibliographic Framework Initiative <http://www.loc.gov/bibframe/>
 渡邊隆弘「ウェブ時代の新しい書誌データモデル “BIBFRAME”」『カレントアウェアネス-E』230, 2013.1
<http://current.ndl.go.jp/e1386>

²³ <http://www.loc.gov/bibframe/pdf/marcl-d-report-11-21-2012.pdf>
 和訳: http://www.nii.ac.jp/CAT-ILL/archive/pdf/Bibliographic_Framework_as_a_Linked_Data_Model_Translation.pdf

・その後 (2013～) の動き

技術情報のためのサイト BIBFRAME.ORG の開設²⁴
 語彙の整備、デモデータ、いくつかの Discussion Paper
 関係機関によるテスト
 Authority の仕様草案を公開 (2014. 3) ²⁵ : 比較的、簡略なもの
 スケジューリング等は、示されていない

★現時点での BIBFRAME の評価 (私見)

<p>評価点 ウェブベースのフレームワーク (MARC を使い続ける不自然さからの開放) RDA への親和性 (実体関連モデルの採用、内容的側面と物理的側面の区別) 図書館の外側で生成されるデータの取り込み (Annotation の設定)</p> <p>疑問点 あらためて、モデルや語彙を設定するのか FRBR や RDA Vocabularies との関係が不明確 (意味的側面に踏み込みすぎでは) 表現形の扱いが不明瞭 どこまでを意図した「フレームワーク」なのか曖昧 図書館界外での活用? 図書館界でのデータ交換? 入力・管理にも用いる?</p>
--

●日本における RDA の受容

- ・NDL が外国刊行の洋図書等に採用 (2013. 4) ²⁶
- ・大学図書館界での注目
 IAL (大学図書館支援機構) の RDA 講習会 (2012. 12～) ²⁷
 その他、機関内での講習会例も
 図書館職員の北米派遣調査 (2013 : 京都大、東京外大) ²⁸
- ・Barbara B. Tillett 氏 (元 LC、当時 JSC 議長) の来日 (2013. 9-10)
 ワークショップ「RDA の理論と実践」(学習院女子大学)
 三田図書館・情報学会、同志社大学図書館司書課程による 2 度の講演会²⁹
- ・上田修一・蟹瀬智弘『RDA 入門』(JLA, 2014. 2)

●新しい日本目録規則 (NCR) へ³⁰

- ・JLA 目録委員会による改訂作業は、本格的には 2010～³¹
- ・2013. 2 に進捗状況を公表³²

<ul style="list-style-type: none"> ・全体構成: 「総説」「資料に関する記録」「典拠形アクセス・ポイント」「関連」の 4 部+付録 ・「資料に関する記録」の部は、資料種別に続けて、体現形・著作・表現形・個別資料の順に ・ISBD 準拠の「資料種別」案 (特に、表現種別が「画像 (動態; 二次元; 視覚)」のような多次元構造 ・「典拠形アクセス・ポイント」の部は、資料、行為主体、主題の順に
--

²⁴ <http://bibframe.org/>

²⁵ <http://www.loc.gov/bibframe/docs/bibframe-authorities.html>

²⁶ 「2013 年 4 月から洋図書等に RDA を適用します」『NDL 書誌情報ニュースレター』24, 2013.3. p.11-12.

「2013 年 4 月から洋図書等に RDA を適用します(2)」『NDL 書誌情報ニュースレター』26, 2013.9. p.1-2.

²⁷ <http://www.ial.jp/rda/index.shtml>

蟹瀬智弘 「大学図書館と RDA : RDA 講習会から見えてきたこと」『図書館雑誌』107(9), 2013.9. p.574-575.

²⁸ 塩野真弓「RDA 導入に向けた米国図書館の現状について: 米国図書館訪問記」『NDL 書誌情報ニュースレター』24, 2013.3. p.6-10

村上遙 「北米図書館での RDA 実践に関する調査報告」『カレントアウェアネス-E』245, 2013.9, <http://current.ndl.go.jp/e1480>

²⁹ 同志社大学開催分 (2013.10.5) の記録は、以下の通り

バーバラ・B.ティレット 「Linked Open Data による書誌コントロール: Bibliographic Framework Initiative のめざすもの」

『同志社大学図書館学年報』39, 2014. *翻訳文責: 渡邊

³⁰ NCR 改訂に関する情報は、次の両サイトを参照 (以降の注では、URL 省略)

日本図書館協会目録委員会 <http://www.jla.or.jp/committees/mokuroku/tabid/184/Default.aspx>

国立国会図書館「書誌データの基本方針と書誌調整」<http://www.ndl.go.jp/jp/library/data/kihon.html>

³¹ JLA 目録委員会 『『日本目録規則』の改訂に向けて』(2010.9)

³² JLA 目録委員会 『『日本目録規則』改訂の方針と進捗状況』(2013.2)

- ・2013.5にNDL 収集書誌部から申し入れ「新しい書誌データ作成基準策定に関する連携について(提案)」
→協議のうえ合意し、9月に連携文書と「基本方針」を発表³³

<連携開始にあたっての基本的な留意・合意事項>

- ・ICP (国際目録原則) 等に準拠
- ・RDAに対応 *従来の目録委員会方針では「長所を個別に検討して取り込む」
- ・現行NCRの評価を反映
- ・論理的でわかりやすく、実務面で使いやすいもの
- ・提供方法も含めて、ウェブ環境に適合 *冊子体はJLAが刊行
- ・規則名称は『日本目録規則』とし、RDA対応を明示するサブタイトル
- ・著者は目録委員会とNDLの連名とし、維持管理も両者の連携で

<連携の進め方とスケジュール>

- ・部分ごとに目録委員会案を策定しNDL 収集書誌部へ送付 →NDLで検討し、修正案を委員会へ
→ 双方の合意で成案に (2015年度前半までのスケジュールリング)
- ・2015年度に新規規則案を公開し、検討集会開催や関係機関との調整
- ・2016年度にNDLと関連機関で試行データ作成・評価 → 規則案の見直し
- ・2017年度に新規規則公開、JLA中心に実務研修の実施

<改訂の主な内容> *全体構成以外は、ほぼ従来の目録委員会方針を維持

- ・規定範囲
 - エレメントの定義 (意味的側面) +用語集の全面的再検討
 - エレメントの記載順序や記述文法 (構文的側面) は扱わない (付録でMARC等へのマッピング)
- ・FRBRモデルへの対応
 - 各エレメントが著作～個別資料のいずれに関わるものかを明確化 (レコードの基盤は体现形)
- ・エレメントの設定
 - 注記などはできるだけ細分化し、個々の要素の独立性・機械可読性を向上
 - 下位書誌レベルの記録は、著作と著作でないものを区別して別エレメントに
- ・資料種別
 - 機器種別、キャリア種別、表現種別に分けた設定
- ・典拠コントロールの重視
 - 著作に対する典拠形アクセス・ポイント (現在の統一タイトル) の重視
 - 典拠レコードのエレメントも扱う
- ・関連の重視
 - 書誌階層の概念は維持するが、位置づけは要検討 *従来の委員会方針では「基礎レベル」を設定
 - 構成書誌レベルの記述規則の明確化
- ・全体構成は、「総説」「実体の属性に関する記録」「実体の関連に関する記録」「付録」

- ・NDL 書誌調整連絡会議 (2014.2.28)³⁴

全体構成案

「第1部 総説」「第2部 属性」「第3部 関連」「付録」とし、第2部は「属性の記録」と「アクセスポイントの構築」に分ける。

「資料種別」条文案

表現種別は、RDAに沿った単次元構造に

³³ JLA 目録委員会『『日本目録規則』改訂におけるNDLとの連携について』(2013.9)

NDL 収集書誌部「新しい『日本目録規則』の策定に向けて」(2013.9)

JLA 目録委員会・NDL 収集書誌部『『日本目録規則』改訂の基本方針』(2013.8)

³⁴ http://www.ndl.go.jp/jp/library/data/h25_conference_report.html

●分類と件名の動向

- ・「日本十進分類法 (NDC)」新訂 10 版³⁵
 各類及び「情報学」の試案公表が 2013 年中に完了
 東京 (2013. 11) 及び大阪 (2014. 3) で試案説明会 → 2014 年刊行?
- ・「基本件名標目表 (BSH)」と「国立国会図書館件名標目表」の連携
 2009 年に連携の動きがあったが³⁶、その後膠着状態
- ・LCSH (米国議会図書館件名標目表)、LCC (米国議会図書館分類表) 等の冊子体刊行停止、オンラインのみに (2013. 6)

おわりに

●本日、取り上げられなかったこと

- ・ディスカバリ・サービス関連の動向
- ・各種識別子をめぐる動向 (例: JaLC)
- ・特別な資料に関わる動向 (例: 音楽資料)
- ・デジタルアーカイブのメタデータ (例: 「ひなぎく」)

●今後 (当面) の焦点…? (個人的なイメージに過ぎません)

- ・国際レベルでは、やはり「書誌フレームワーク」
 RDA データをどのような器で管理していくか
 他のメタデータ標準との相互運用性をどう実現していくか
 → そこが落ち着いた後に、再び「目録サービス」の議論?
- ・日本での焦点
 NCR の予定通りの進行
 NDL の書誌フレームワーク
 NACSIS-CAT の RDA 対応
 NDL、NII、民間 MARC の相互関係
- ・どの問題にも「LOD 時代」が通底

³⁵ 日本図書館協会分類委員会 <http://www.jla.or.jp/committees/bunrui/tabid/187/Default.aspx>

³⁶ 平成 21 年度書誌調整連絡会議報告 http://www.ndl.go.jp/jp/library/data/h21_conference_report.html#05

目次 (Table of Contents)	14 ページ
0 章 序論 (Introduction)	15 ページ

<セクション1～4：実体の属性>

セクション1: 体現形および個別資料の属性 (Recording Attributes of Manifestation and Item)

- 1 章 一般的ガイドライン (General Guidelines On Recording Attributes of Manifestations and Items)
16 ページ
- 2 章 体現形および個別資料の識別 (Identifying Manifestations and Items)
132 ページ タイトル、責任表示、版表示など 18 (+77) エレメント (従来の記述の中心部分にあたる)
- 3 章 キャリアの記述 (Describing Carriers)
83 ページ 機器種別、キャリア種別、数量、大きさ、材料など 21 (+41) エレメント (従来の形態エリアが中心)
- 4 章 取得とアクセス情報の提供 (Providing Acquisition and Access Information)
4 ページ 入手条件、アクセス制限など 5 エレメント

セクション2: 著作および表現形の属性 (Recording Attributes of Work and Expression)

- 5 章 一般的ガイドライン (General Guidelines on Recording Attributes of Works and Expressions)
7 ページ 調査情報源など 3 エレメント
- 6 章 著作および表現形の識別 (Identifying Works and Expressions)
163 ページ 著作のタイトル・形式、表現形の内容種別・言語、など 16 (+2) エレメント
(従来の統一タイトルなど。音楽資料、法律、聖典などに対する特別規定を含む)
- 7 章 内容の記述 (Describing Content)
35 ページ 読者対象、要約、縮尺、色など 28 (+21) エレメント (従来は第 3 エリアか注記だったもの)

セクション3: 個人、家族、団体の属性 (Recording Attributes of Person, Family, and Corporate Body)

- 8 章 一般的ガイドライン (General Guidelines on Recording Attributes of Persons, Families, and Corporate Bodies)
11 ページ 調査情報源など 6 エレメント
- 9 章 個人の識別 (Identifying Persons)
61 ページ 名称、日付、称号、性別など 17 (+5) エレメント (従来の個人標目にあたる)
- 10 章 家族の識別 (Identifying Families)
12 ページ 名称、種別など 8 (+2) エレメント
- 11 章 団体の識別 (Identifying Corporate Bodies)
71 ページ 名称、日付、場所、言語など 11 (+7) エレメント (従来の団体標目にあたる)

セクション4: 概念、物、出来事、場所の属性 (Recording Attributes of Concept, Object, Event, and Place)

- 12 章 一般的ガイドライン (General Guidelines on Recording Attributes of Concepts, Objects, Events, and Places) 未刊
- 13 章 概念の識別 (Identifying Concepts) 未刊
- 14 章 物の識別 (Identifying Objects) 未刊
- 15 章 出来事の識別 (Identifying Events) 未刊
- 16 章 場所の識別 (Identifying Places)
15 ページ 名称など 2 (+2) エレメント (ただし、名称以外は未刊) (従来の地名標目にあたる)

<セクション5～10：実体間の関連>

セクション5: 著作～個別資料の間の主要な関連 (Recording Primary Relationships between Work, Expression, Manifestation, and Item)

- 17 章 一般的ガイドライン (General Guidelines on Recording Primary Relationships between a Work, Expression, Manifestation, and Item)
10 ページ 「著作→表現形」「表現形→著作」など 8 エレメント (FRBR の「ハイレベルの関連」)

セクション6: 資源と個人、家族、団体との関連 (Recording Relationships to Persons, Families, and Corporate Bodies Associated with a Resource)

- 18 章 一般的ガイドライン (General Guidelines on Recording Relationships to Persons, Families, and Corporate Bodies Associated with a Resource)
5 ページ 関連指示子の 1 エレメント (このセクションも FRBR の「ハイレベルの関連」)
- 19 章 著作に関係する個人、家族、団体 (Persons, Families, and Corporate Bodies Associated with a Work)
32 ページ 創作者など 2 エレメント
- 20 章 表現形に関係する個人、家族、団体 (Persons, Families, and Corporate Bodies Associated with an Expression)
9 ページ 寄与者の 1 エレメント
- 21 章 体現形に関係する個人、家族、団体 (Persons, Families, and Corporate Bodies Associated with a Manifestation)
6 ページ 出版者など 5 エレメント
- 22 章 個別資料に関係する個人、家族、団体 (Persons, Families, and Corporate Bodies Associated with a Item)
4 ページ 所有者など 3 エレメント

セクション7:主題の関連の記録 (Recording Subject Relationships)

23 章 一般的ガイドライン (General Guidelines on Recording the Subject of a Work) 未刊

セクション8:著作～個別資料の間の関連(Recording Relationships between Works, Expressions, Manifestations, and Items)24 章 一般的ガイドライン (General Guidelines on Recording Relationships Between Works, Expressions, Manifestations, and Items)
7 ページ 関連指示子など 4 エレメント (本セクションは、同一実体どうしの関連)

25 章 関連する著作 (Related Works) 7 ページ 関連著作、説明の 2 エレメント

26 章 関連する表現形 (Related Expressions) 3 ページ 関連表現形、説明の 2 エレメント

27 章 関連する体現形 (Related Manifestations) 4 ページ 関連体現形の 1 エレメント

28 章 関連する個別資料 (Related Items) 1 ページ 関連個別資料の 1 エレメント

セクション9:個人、家族、団体の間の関連(Recording Relationships between Persons, Families, and Corporate Bodies)29 章 一般的ガイドライン (General Guidelines on Recording Relationships Between Persons, Families, and Corporate Bodies)
5 ページ 関連指示子など 3 エレメント (本セクションは、個人・家族・団体の相互の関連)

30 章 関連する個人 (Related Persons) 2 ページ 関連個人、説明の 2 エレメント

31 章 関連する家族 (Related Families) 2 ページ 関連家族、説明の 2 エレメント

32 章 関連する団体 (Related Corporate Bodies) 2 ページ 関連団体、説明の 2 エレメント

セクション 10:概念、物、出来事、場所の間の関連 (Recording Relationships between Concepts, Objects, Events, and Places)

33 章 一般的ガイドライン (General Guidelines on Recording Relationships between Concepts, Objects, Events, and Places) 未刊

34 章 関連する概念 (Related Concepts) 未刊

35 章 関連する物 (Related Objects) 未刊

36 章 関連する出来事 (Related Events) 未刊

37 章 関連する場所 (Related Places) 未刊

<付録 (Appendicies) >

付録 A. 大文字使用法 (Capitalization) 37 ページ

付録 B. 略語 (Abbreviations) 8 ページ

付録 C. 冒頭の冠詞 (Initial Articles) 10 ページ

付録 D. 記述データのためのレコード構文 (Record Syntaxes for Descriptive Data)

66 ページ ISBD、MARC21 による構文表現(マッピング)

付録 E. アクセスポイント管理のためのレコード構文 (Record Syntaxes for Access Point Control)

40 ページ AACR2、MARC21 による構文表現(マッピング)

付録 F. 個人名に対する付加的指示 (Additional Instructions on Names of Persons) 18 ページ

付録 G. 貴族の爵位等 (Titles of Nobility, Terms of Rank, etc.) 3 ページ

付録 H. 西暦の日付 (Dates in the Christian Calendar) 1 ページ

付録 I. 資源と個人・家族・団体の関連指示子 (Relationship Designators: Relationships Between a Resource and Persons, Families, and Corporate Bodies Associated with the Resource)

8 ページ 「役割表示」にあたるものを整理:約 120 種

付録 J. 著作～個別資料間の関連指示子

(Relationship Designators: Relationships Between Works, Expressions, Manifestations, and Items)

18 ページ FRBR に示された関連の種類(派生、記述、全体部分、付属、継続をさらに細分)を整理:約 320 種

付録 K. 個人・家族・団体の間の関連指示子 (Relationship Designators: Relationships Between Persons, Families, and Corporate Bodies)

2 ページ 個人同士、個人と団体の間、などの関係の種類を整理:28 種

付録 L. 概念～場所の間の関連指示子 (Relationship Designators: Relationships Between Persons, Families, and Corporate Bodies) 未刊

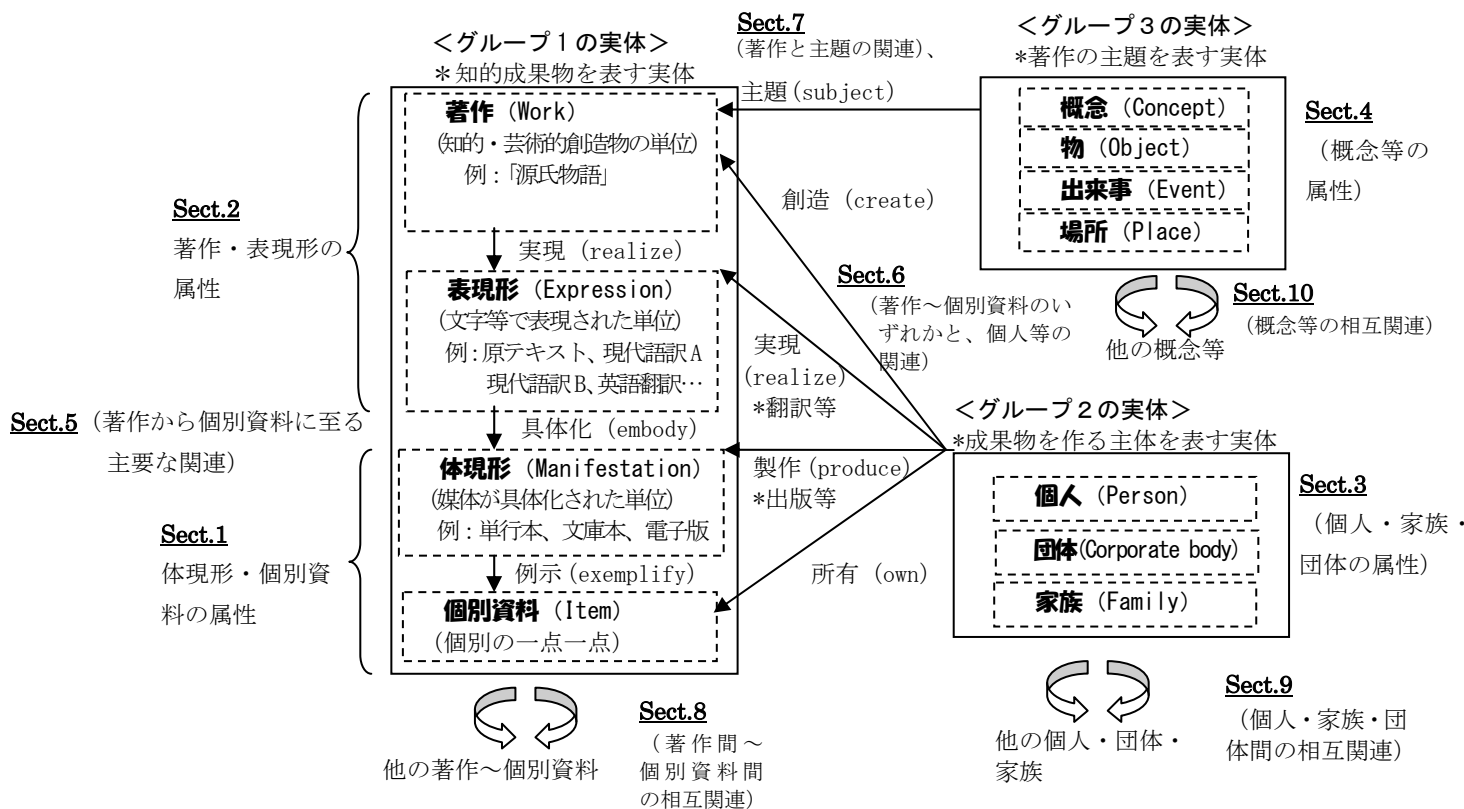
用語集 (Glossary) 56 ページ

索引 (Index) 50 ページ

注: ページ数は、RDA Toolkit の PDF 表示インターフェースによる: 属性 610、関連 94、付録 211、その他 135→計 1050

エレメント数のカッコ内は下位エレメント (サブエレメント等) 数

エレメント総数: 属性 133 (+157)、関連 39



★RDAの特徴(私見) 渡邊「図書館目録をめぐる動向：2007～2012」

<http://www.tezuka-gu.ac.jp/public/libsci/kaken2010-report/overview2007-2012.pdf>

(前略)

①FRBRに密着した構造

前述の通りである。

②典拠コントロールの位置づけ

著作や個人を「実体」ととらえ、それぞれに「実体」を設定することは、書誌レコードに付す「標目」や「参照」を規定するのみのAACR2とは異なり、典拠レコードを作成して諸情報を管理する典拠コントロール作業が規則上明確に位置づけられたといえる。次項に述べる「著作」等の扱いを含めて、典拠情報の比重が相対的に高められたといえる。

③資料の物理的側面と内容的側面の整理

「著作」から「個別資料」まで順次具体化されるモデルに沿って、「体现形」「個別資料」(セクション1)と「著作」「表現形」(セクション2)を分離したことで、資料の持つ物理的側面(キャリアの面)と内容的側面(コンテンツの面)の整理が図られた。従来不備が指摘されてきた資料種別(GMD/SMD)についても、内容種別(「表現形」の属性)とメディア種別・キャリア種別(「体现形」の属性)に整理されている。また、「著作」「表現形」に対しては多くの属性(従来は注記扱いだったものなど)が新たに設定されており、内容的側面をより重視する姿勢が見られる。

④「関連」の重視

FRBRに密着した結果として、実体の属性とは別立てで「関連」が重視されるようになった。なお、RDAではセクション5以下で結ばれる実体の種類ごとに関連を規定するが、一部の関連については「関連指示子(relationship designator)」を設けてさらに詳細な関連の種別を管理しようとしている。例えば付録Iには「資料と個人・家族・団体間の関連」(セクション6)に対応した約120種の関連指示子一覧があり、これは役割表示をカテゴリ化したものである。また付録Jには「著作～個別資料どうしの関連」(セクション8)に対応した約270種の関連指示子一覧があり、翻案・翻訳・階層構造など種々の書誌的關係がカテゴリ化されている。

⑤エレメントの増強と値の管理

属性・関連を示すデータ項目(エレメント)が大幅に増やされた。例えば従来の形態事項にあたる「キャリアの記述」(3章)では、「数量」「大きさ」に加えて「書写材料」「筆写材料」「製造方法」「レイアウト」など約20のエレメントが設定されている。AACR2では注記や「その他の形態的細目」に入力されていたものや、MARC21フォーマット上では識別されていたものの多くが、RDAではエレメントとして分節化され、弁別可能となっている。また、「紙」「皮」「金属」... (「書写材料」の項)のように語彙リストを示し、選択入力を基本とするエレメントが増えた。もちろんタイトルなど転記によらざるをえない項目も多いが、値を統制できるエレメントでは積極的に語彙リストを提示している。

⑥機械可読性の向上

①～⑤に述べたことは、それぞれの意義を持つとともに、機械可読性の向上という側面からもとらえられる。これからの目録規則において、目録情報の機械可読性(人間ではなくコンピュータが明確に認識できるデータ保持)は極めて重要である。RDAの策定過程ではエレメントごとにその値の性格や適用されるスキーマなどを整理した「エレメント分析(element analysis)」という文書(刊行されたRDA本体には入っていない)が作られるなど、機械可読性が意識されていた。

(以下、略)